

【吉岡実の俳句】

八木 忠栄

吉岡実は言うまでもなく、戦後詩人として注目された詩人である。若いころに俳句や短歌もつくったし、昭和十六年満洲に出征した際、「万葉集」と白秋の歌集『花檉』を持参したという。詩を書き出してから晩年まで、歌集や句集もさかんに読んだ。誓子、波郷、草城、三鬼らの名前を挙げ、永田耕衣について「鮮烈な個性」に驚嘆した、とも書いている。没後刊行された句集に『奴草』（二〇〇三）があつて、全句が収められている。

春雨や人の言葉に嘘多き

その冒頭に収められた右の句は、昭和十四年に草城の「旗艦」に投句されたもの。好きな句も多いけれど、私は詩集『サフラン摘み』（一九七六）中の詩に収められた七句に、驚嘆とともに注目せずにはいられない。

湯殿より人死にながら山を見る

喪神川畜生舟を沈めける

「湯殿」は湯殿山のこと、「喪神川」は最上川のこと。このような類例のない捉え方・詠み方もあるのだ。作者が詩人であること、とりわけ吉岡実を待って初めて可能になった、驚異的な作句であろう。